

繪本因村物語

五

~ 13  
3300  
5





3300  
5

復讐 田村物語 卷之五

上卷

武關 川上 魁 老人 編輯

下流 梅梢軒關旭 訂止

第九回 武門の花

其時田村磨兵衛の白雲は、  
も遅くと披れえまの。潮も浸る、乾も中ね、御ふこたれは滴る  
粟も君が涙の露る、とゆへと、  
懇ふかひ、  
暮てもそおとの空而已ら、  
かた月日、  
度不意を、

田村物語 卷之五

本大學出版部



ころを盡せるふよけり。去るに其委れと民部より書記して告  
 進らそなれおれおれ。熟し一足足の御事なりし。いと哀れやか  
 なく。又巻込ありし民部が書翰をも投けせり。近頃竊み付く  
 弓木甲斐守照門岩岸利部太郎成等深くも計り設け大伴  
 貞純大伴高貫おを荷擔太子次郎。延壽石以て終ふ亡君  
 荷田磨を冤の罪おとし。且白波が狂乱して市中  
 吟ひ。彼亦が密計を悉く口走り。事既お顯れんとす。不及んで照門  
 始め皆逃失。れ次第まで残なく書記し。就る。往年別とす。お  
 臨み。密お作ありし。今ぞ其敵を知らん。かく復讐言とせ。石  
 なら。如何も明慮あり。この告なりけ。田村磨のこれ  
 を御覽し。無念肝腸お徹し。おど御髪逆。お立昇り忠孝

節怨の意氣盛はして恰も荆軻が髮冠を衝んとす。お等々容  
 貌常お替りせり。い。又もお静めて再三再四らえ。熟し  
 へ。天お喜び地お悦び。ほつと息けきて宣く。有か。や今日只  
 今。正しく其敵を知ら。され。今。お合。お父上の末期。お  
 とも。看とて。古歌。かり。お斐。おど。おひ。に。  
 今。か。の。門。出。り。り。と。在。原。の。お。お。歌。を。記。し。と。敵。と  
 お。の。弓。木。甲。斐。と。其。初。目。前。お。檢。使。の。役。な。れ。は。足。お。憚。り。態。と  
 古。人。の。歌。を。借。用。ひ。て。人。お。お。其。お。お。を。擬。某。お。推。察。せ。り。お。難  
 報。せ。よ。と。の。御。事。な。らん。お。所以。如何。と。な。れ。ば。かり。お。の。ゆ。お。甲。斐  
 ち。と。お。お。に。と。は。是。まで。弓。木。甲。斐。へ。かり。お。の。人。と。お。お。ひ  
 多。い。お。不。圖。好。計。お。達。し。お。ひ。ね。と。なり。又。下。の。句。れ。い。ま。か。ら。り



の門出なりけり。上ふりあてりなれば。終ふ家族多し。顔も得  
 ありせむ。死されりよと云意。擬するところを察し。はひせ  
 たり。尤もれば。民部が告知せしむ。能も符合せりと宣ひて。  
 濱は。堪と。是より。御あつ。海。交せられ。如何も。此。寫と  
 暗。迷。忍び。に。敵。尋。人の。次。と。ひ。と。其。計。畧。と。て  
 回。され。斯。都。右。大臣。藤原。の。是。公。中。納。言。左。右。種。継  
 亦。會。合。多。い。い。う。も。討。つ。て。弓。木。照。門。岩。岸。刑。部。太。郎。左。外。大。伴  
 貞。純。大。伴。高。貫。等。の。人。の。草。を。分。て。も。尋。出。え。り。の。と。極。  
 小。肺。肝。が。と。れ。あ。と。り。今。ふ。その。便。以。得。と。然。る。勢。別。鈴  
 鹿。郡。の。知。縣。より。早。馬。以。取。せ。り。告。り。れ。近。頃。鈴。鹿。山。の。山。中。に  
 怪。け。な。れ。人。と。多。く。住。り。其。は。惡。鬼。の。と。く。珠。小。神。通。廣。大。小

あ。く。不。測。の。妖。術。以。行。ひ。往。來。の。人。と。惱。し。又。去。て。近。御。の。人。家  
 以。開。し。財。寶。以。掠。り。美。女。以。奪。ひ。て。山。陣。小。携。り。し。これ。逆。に  
 力の。忽。ち。打。殺。し。切。殺。り。殺。れ。殺。れ。人。と。多。く。あ。れ。あ。そ。惡。業。殊。場  
 て。頃。日。も。願。官。府。が。お。思。ひ。も。傍。若。無。人。の。行。跡。を。し。し。め。む。  
 是。以。辭。ん。が。た。め。某。自。ら。官。軍。と。帥。に。搦。捕。と。せ。し。に。実。お。そ。う。げ。あ。る  
 鬼。も。人。も。分。か。か。れ。赤。と。髪。ハ。左。右。乱。と。腰。小。虎。豹。の。皮。以。纏。  
 面色。或。ひ。ハ。赤。く。或。ひ。ハ。青。れ。惡。鬼。亦。二。三。十。が。ほ。と。欠。鉄。棒。又。ハ。戟  
 を。取。り。打。向。へ。る。勇。力。亦。如何。も。敵。が。く。二。度。三。度。戦。ひ。し。終。小  
 勝。事。以。得。む。刺。へ。彼。等。が。為。小。人。多。く。死。す。今。更。小。詮。と。し。し。これ。を  
 い。う。な。れ。者。々。此。山。中。に。お。移。り。ん。と。竊。に。間。者。以。入。り。其。後。子。を。窺。ひ  
 何。ぞ。と。う。く。人。岩。岸。刑。部。太。郎。こ。そ。山。陣。の。魁。首。と。なり。今。之。韋。駄。天





鄂ふ公郷  
會合あひて  
鈴鹿山への  
討手誰彼  
と争儀は

大江國房

とつて

田村初吾卷之五



是公郷

田村初吾卷之五



刑部と名宗天地におそれ人欲を擬し周く無頼の悪俗を集  
 のは是れ組とる者どもあり。隱刑鬼毒丸霹靂段平天魔八翁鐵  
 權二鬼首眼翁鐵軍太足亦始として其勢幾といふは知と。  
 山寨不満くて次まお勢派増少へ今ハそや某が力に及むと速  
 小官軍成し向られ。万民の憂を拂ひあらんるのそ願うられ  
 のさかりは是公郷大に驚ひて曰近比傳はく勢別鈴  
 鹿山に強盜住く人民を惱すと云沙汰あわれが斯や大膽  
 なら行跡をみるさんといひさや。し其依るる速討討を  
 下えん誰う打向く妖鬼退治せんといりけしハ列居る  
 人も皆目と目成合せ。未だ答る者もまうりし。逆未坐  
 より一人の健男進出某小三百余の兵を授るるハ魔軍悉く

暫時あうら亡。韋駄天毒丸かひ扱んく持あんといふと  
 勇しくはへけしハ是公郷をじり満座の人驚ひて足おんれ  
 は弓削大進大江國房といふ者なり。此國房ハ元來中納言種継  
 少く所縁ある者なりけしが彼頗武勇ありといふも其言  
 實なるぞ。常に慢がれ公あがゆふ種継郷を疎く  
 親うとばとぞ。然れ種継も此日傍に在せ。今國房が方言  
 其若しくおひひて宜ひたり。如何小國房御辺鈴鹿の魔軍  
 を等困ふること勿。是御辺の相手にあふは。外ハ良むを  
 携んで向あらんといふ。云も後が終小國房又しく。種継郷も  
 兼く某が言其実よるぬとて疎くも。如何ぞ此場におい  
 自ら言を喰つ。上ハ欺きをいふんやと。面色えてしければその







いふなる者もや大膽ゆも夜中ふ此所を過る中へ人若くは山の方  
より尋ねる人歎いと不審はよ何ゆめれ尋みゆらんと士卒を西に  
人うち向ひて如何ゆ夫よ見せしむる何者ぞいづこより来りて此  
夜中にこの所を過るや將其荷へれ桶を如何する者ぞと尋み  
同み彼人足成ゆき大に驚れ怒り二つの桶を打捨跡をもんじ  
て進行かとい曲者よけ捕と操ふ操ふて追々間近くなれりふ  
飛うろく襟を振ひて引戻せば振放さんとす所を弓手馬を  
よりまかりて押して縄を掛りりり。去りし士卒亦件の大男を縛  
及び二つの桶を携へ陣中に撃手ゆり審みその趣を國房に告げ  
られ國房と怒り出て彼男も同くいへら。女と定いつなる者なれば  
夜中に此所を過りいづこより何地へ行んとすれ明も生れんは速に

命は終をせしと威しけ高きなりて尋み同ふ彼男と處の根も合を  
戦慄してくら。相公やぶ怒り静め。某斯なれ上り実情次  
告奉らんふか。あつて一命を助とめ。某ハ近江の國土山の驛  
中井住とれ小七といふ土民なれが。我家ふ昔より美酒次  
作るの良法を傳く。代々名酒を造りてとて活業とせし。近頃  
鈴鹿山の妖鬼ホナリ切てし。汝酒を賣んとするは常  
に我山陣に登りて酒を高む。山陣の爲も便よれ。在てこの  
事肯む。此より汝も幾の益を得べし。若又我山陣に酒を  
るのみ固辞バ直みこの酒店を踏破つ。家内塵ふなると  
のことなれゆ。妖鬼ホガる酒を賣るの官府への忠めれば  
如何も是を肯し。おどくも。若肯む。耐はいう成憂め。再連



も知れれば命も替はる辛じて二里余の道を酒を携て日の暮る所待山に登り妖鬼亦賣ふへ其夜へ山止宿は明日も夜入る後又暗山を下り土山の驛より降りぬなり然小昨夜もりのものごとく酒を商ひし中近頃を其直えちぐ償ふ只管酒を乞ふゆゑ某の酒を我酒を商こともその利益を得とえでとせむこそ名酒をも作出せたり左の如く此頃を直え滞アとく如何ぞよく多く酒を賣る所は妖鬼亦もえより件の名酒を好む此断みこ流伏しぬる然ば直を償んばと此頃を實小銭の乏しは是を以て行て録み昏よと云れ虎の皮は續鼻禪をこの酒桶の中に入置こ又明日の夜も酒を持来れといふこと此古き虎の皮の續鼻禪

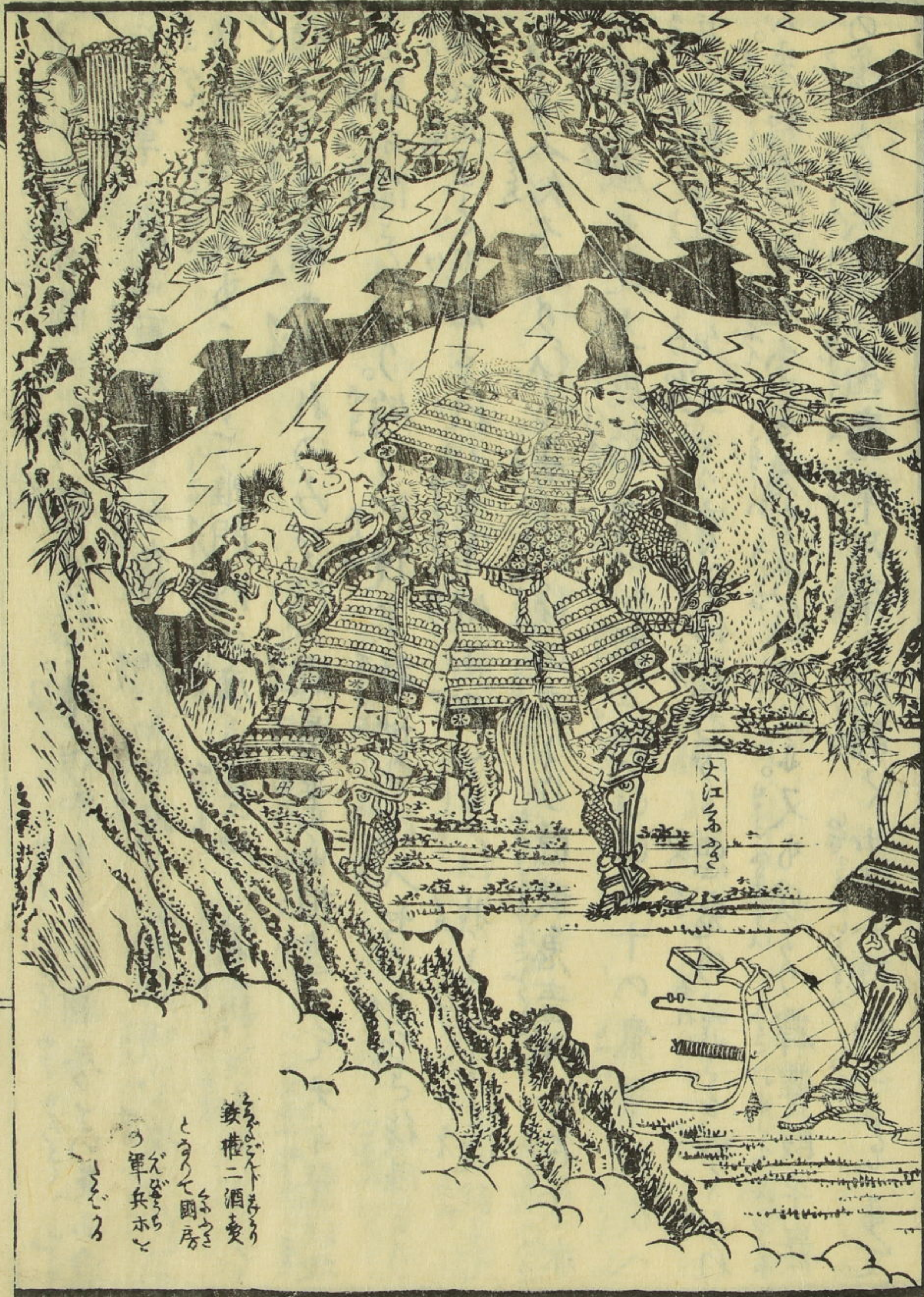
を何うせん餘り妖鬼亦が某の慢こと甚しければ公中樂うと次獨言しけ往まに思ふと相公の屯したる陣前よゆさかると公驚れあつて道に道にせんとせしに斯ははしわ妖鬼の伏願くは足本の明小察し度く仁慈を垂多ひと此場をえのびしたる此以後某が家遠く化所も移て妖鬼亦が為小酒を賣こと成るとははれ免たし人と知らば住たれあぞ國房これとせし士卒に命じて件の桶の蓋を用えれば酒の薫而己して空桶の中に行厨の包と二三百の銭あり又一ツの桶をこころぬ実も小七がといふ違つと虎の皮は續鼻禪のとも流ぐ毛と脱果皮の面木目のどれ丈入半らせく敬し次後つて杯して入置ぬ國房これをいふ公中におりて一笑



借ふ。又同く之らく。如何も汝が。次々其情もあらんま  
と彼山陣も通れり。唯ふ疑ひも解がし。されは汝命もかへり。口が  
為ふ彼山の案内をさらんぬ。我速小妖鬼を平て功を立んぬ。汝も  
禍却く福も轉ぐるの耐なり。此事如何あらんと同く。小七飲  
く是も過ぐれ易れり。のゆえに幸なるう。彼山陣もても今日  
相公の到着しなまつれなれば。よも軍の明日もふんと油断なく。  
今宵も某が酒も二桶もゆらまはりて。暫時お傾け。皆大の母  
酔を盡せる折なれば。今より速小攻登りまらぬ。その伎なれと討く。  
一戦も功を遂ぐるゆえに。某命も助ぐれの大恩も報ふれ。小安内を  
仕らんといふ。國房歡喜斜つらぬ。はなは夜討し。塵もせん。こと  
天我も切なまをせむ。時なりと。爵踊し。勇進を。衆卒を催促し。

小七は案内者として先母を辭くと押出して暗小鈴鹿川を打流り。  
巖も踏かけ。藤もさり付辛じて坂路をさぬ。に小七後代顧く  
りらく。あれえま。月も對して木の間隠れ。見えぬ。ハ則妖鬼等  
が住家なり。相公暫くは待たぬ。某再びし。こも行酒の直に求  
れ。はほもてな。直も火に附て合圖がう。て。ま。れ。を。その耐一度  
小攻入る。といひ捨て。足早もこを走り。往ぬ。こと誰も知らん。鐵  
權二を酒賣賈客も出立。土山の沢なれ。酒店の小七といふ。名  
酒を商者の名。火街に。れ。韋駄天が討あせり。され。さ。る。夜  
ハ三更過る。頃寒風肌を穿く。松風諷くと空も響。四方面  
声なく。物凄に折か。忽ち。向ふ。細くと火燃出。され。え。不  
間も火氣盛。天城こぼして。車輪の。は。燭空中も。あ。る。あ。そ。







ナリ小七が合圖の火掛られど。續けや面くと國房の先に進  
 官軍一度小取詰り。石龕の門を打破りおめれ叫び攻入りし。  
 魔軍一人もえへど。唯門内の廣き空地に柴薪を山のごとく  
 積上り火炎盛り燃れのみわれ。國房案も相違して火中驚に扱  
 と計小陥されり。悔りに慢り。敵地小深入せり。とて後陣より  
 退れ出よと下知され。官軍俄お反と失ひ我よ人よと混りて。  
 たふよ。怨をおりひも奇ふ。以後の方より隱形鬼毒丸と名を赤  
 髪ハ風も逆立虎豹の皮を腰に纏ひ。四五十の魔軍に従へ  
 長戦と取り欠出る有り。左も悪鬼の荒る如くなれ  
 先戦どして九分を魂を失ひし。又も峽より霹靂正殿平巖  
 の蔭より天魔八萬魔軍以卒して討く。出皆一揆の出りしめて。

暮直並並立れ。官軍いづる敵とべれ尸と積り山のごとく。血  
 と流し川成なせり。國房ハ爰と先途と戦へ。崩れたる官軍  
 の前踏も猛火も行なれ地なり。後ハ敵は取切られ左右ハ熾く  
 山もれ逃出る方もなく。十方より折らぬ不圖。官軍  
 弓矢の方ハ巖の間。枯草も埋し。沙迷り。足ぞ若くハ技道も  
 めく。俄小公臆し。未練も國房ハ件の間道へと走り行ハ大將  
 こと退さる。我くいづて叶えれと。士卒等も跡も續き魚貫し  
 て遁んと。しも小狭き沙迷を我先中と押合ふ。こそわれ魔軍  
 ハ得らんと追かす。小忽天地も崩り音して。憐し。國房を始ら  
 洩さし。官軍等一人も残らば。穿し入り。上と下へと蠢く。海を  
 魔軍等速も追取擁て。終り悉く。獨捕凱哥。此こそあがりたる。





去程中妖鬼亦ハ件の火次打消し。國房と傳へ山陣に連なり。韋駄  
 天の前より出せむ。後もなく隱形鬼亦も合身なりて回居せり。其時  
 韋駄天と上座なれ。草の上より安んじて雷のこゝろを声に勵して之  
 らに汝何者か。我が此山陣を忍びと。敢てすめつ。虎の鬚を取んと  
 され。今汝亦殺と。易されど。蟲を殺とに等し。されば。我は汝に仁公  
 汝以て命の助をす。すれは。急に都に帰る。ていふ。鈴鹿山乃  
 鬼神亦不日は。都に攻登るべし。首を洗つ。待べし。と。之。夫疾く  
 彼等。次利取。耳鼻を然く。家土産みさせよ。と。下知され。鉄權二  
 鬼首眼。藏木。始。しく。と。立か。て。悉く。赤裸と。は。而。後  
 或る鼻。然。又。耳。裁。足。を。よ。れ。都。へ。の。家。土。産。し。と。同。音  
 子。と。笑。つ。追。拂。ひ。へ。大。惡。無。道。の。處。置。お。り。と。す。れ。も。

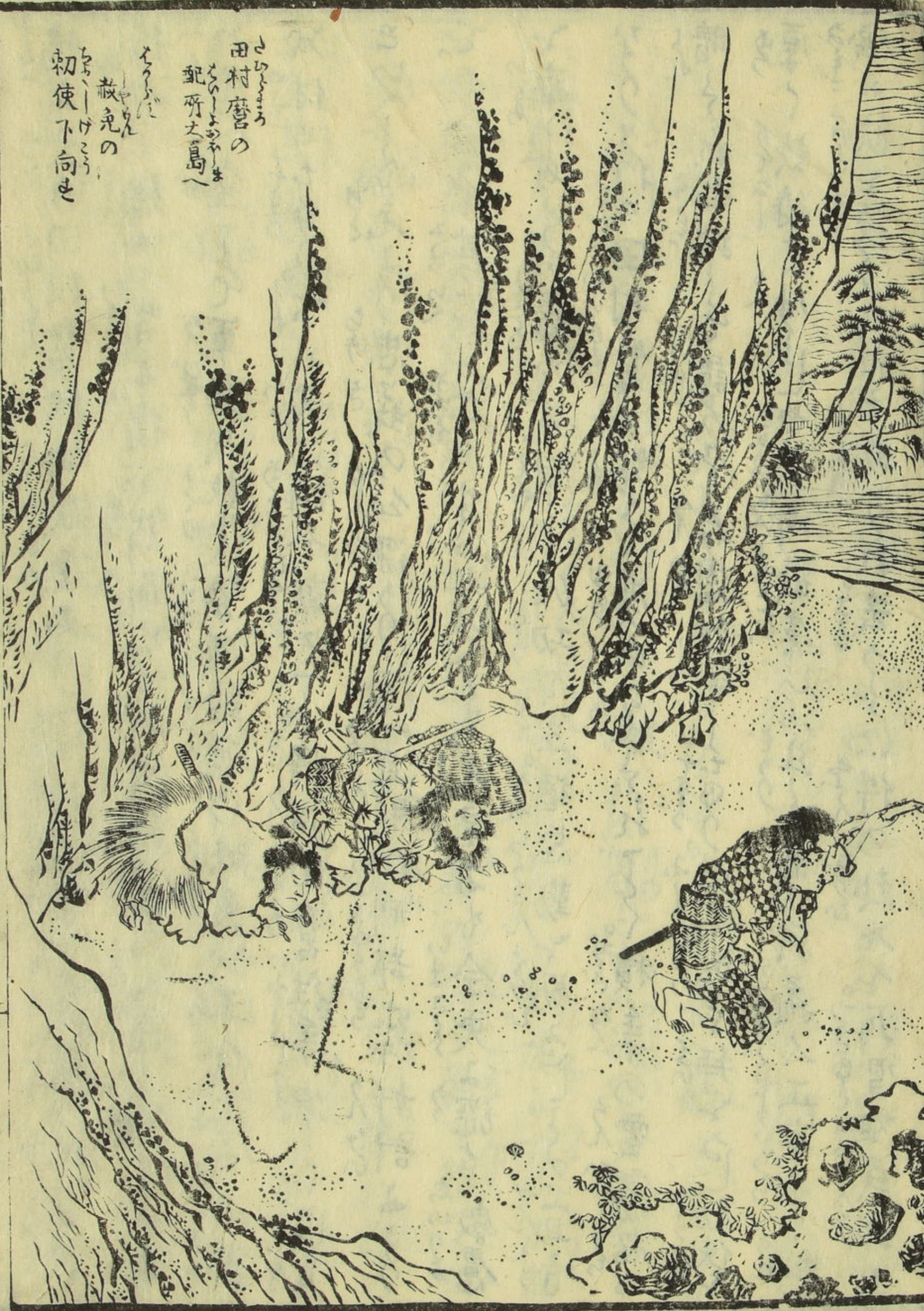
國房ホも命助アし。暗に飲ひ。若痛次。忍び。夜の内。お道。を。急  
 けて。我陣。に。立。ぬ。顔。と。白。と。合。入。合。只。忙。然。と。れ。む。り。なり。し。が  
 猶も。こ。は。こ。海。母。も。似。氣。う。勝負。も。是。兵。家。の。常。な。れ。ハ。詮。と。ま  
 一。と。い。し。も。若。く。所謂。羊。質。虎。皮。者。辱。と。し。れ。も。是。等。の  
 人。と。や。し。め。る。べ。扱。も。國。房。の。如。何。も。な。す。べ。術。多。く。若。く  
 と。鈴。鹿。の。陣。屋。を。引。拂。つ。都。へ。立。ぬ。り。是。公。郷。の。籠。み。と。あり。て。件  
 の。ゆ。い。も。物。語。自。慚。愧。小。耐。を。罪。伏。し。た。れ。是。公。郷。の。分。野  
 成。委。く。尋。問。せ。後。宣。く。これ。原。某。が。罪。なり。嚮。中。種。継。が。言  
 たり。ら。ひ。が。れ。め。す。れ。所。な。れ。如何。母。も。御。邊。の。事。ハ。此。入。終。不  
 奏。聞。な。さ。べ。れ。小。孫。忠。勤。の。思。ふ。ごと。く。宣。ひ。と。宣。ひ。と。外。お。寛  
 仁。の。沙。汰。なり。け。是。は。國。房。を。深。く。心。お。伏。し。面。目。な。く。も。す。と。と。



類も汗く退出せり。斯く是公御その夜ハ獨眠多うぞ。ひこころ  
 思慮を回しし。鈴鹿の妖鬼ホ等困の敵あつた。去うたお  
 重て官軍次差向若勝幸次得ぞ目次費を討ハ彼ホよく  
 官府を恐るると然のこなきに天下の聞もいさふ人されど此  
 討おらそ。田村磨次百返して爵禄を授これに鈴鹿の討ふと  
 二一拾の。一の妖鬼次静んる疑ひなく。二の妖鬼も公のふ  
 寄く父の讎をも復さべけれハ勇威日ごらぬ十倍。忠孝兩  
 全の功次立前田磨の汚名も洗ふ足る。坂上家繁榮せんハ  
 公私とも幸甚あふ人と志を凌ぐハ心中お深く歎び明  
 を待た次の日糸内ありて件のふども天皇へ巨細ハ奏聞せ  
 せし。天皇も歡慮らるや。田村磨次を歸し。名

家の後とまされたり。將彼が武勇の程をもるべとありたり。是  
 是公畏く直小大嶋が在田村磨の許ハ勅使を以て件の宣  
 旨次を傳らるる。夫福と邪惡の家ハ入事や。日月ハ曲定  
 を照らすと。かや坂上の田村磨と父の前田磨寛の罪ハ達給  
 ひりぬよりして。長れ歲月伊豆の大嶋小捨れ身ハ千辛万  
 苦を受とりとも。忠孝の御志はらの間も怠りたふと。叔も  
 佐々木民部が告ふ父の誓ハ知れらるハ如何あもして一先此  
 大嶋を逃し。素懐遠の後の再度こつ時ハ歸る。母り。私  
 お罵と去法を犯するの罪ハ腹十文字ハ搔切死を以て謝せ  
 ざる。公を極て其用意頻なりし。おりひさや。統ふ天の惠時  
 至りて延暦十一年十二月二日。かひもくも泰なり。勅使この





田村磨の  
配所之島  
初使下向也

田村勿吾卷之五

十四



田村勿吾卷之五

十三



嶋に至り。田村磨屋御赦免ありて。父蒔田磨屋が舊領の地を悉く  
 給つて。總て昔に復し。然而已う此度討ちの大將に封する急  
 れ都へ登りて。軍兵を救正へ勢州鈴鹿の妖鬼を平げ。上を宸襟  
 休め。下の父の讎を報る。将蒔田磨屋往年少く。過有  
 とり。も元より忠義の公深う。一旦照門刑部が奸計ゆより  
 て。あかしく其家と亡し。あかしく。天皇も今更に深く。慶應  
 を痛しめ。あかしく。早くに功を立。猶忠勤を励む。その旨  
 たり。され。田村磨屋の始。夢のまゝ。積年の雲霧忽ち  
 暗く。公地して。謹ん。君恩を謝し。西に向。拜。勅使を  
 厚く。款待して。ゆ。其。御歡喜。あ。斗。あ。人。正市。あ。ほ。  
 涙。袂。を。絞。つ。た。れ。そ。断。な。れ。去。つ。た。件。の。赴。を。月。雪。姫。民。部。が

許へ告志くせしむ。疾く迎ひの人数を差越へ。と。使へ。され。月。雪  
 姫。あ。さ。さ。形。種。継。御。満。千。代。の。以。飲。ひ。一。方。な。り。勇。之。進。ま。ぬ。者。あ  
 なく。民。部。も。こ。も。の。公。女。あ。よ。り。も。愛。う。う。け。う。と。勸。喜。小。耐。も。直。ら。し。小  
 舊。功。の。臣。等。と。呼。集。れ。小。是。次。傳。え。れ。者。も。ハ。招。へ。し。我。も。く  
 と。乳。身。り。た。れ。行。み。不。日。過。半。ハ。古。に。復。し。た。れ。少。そ。速。に。古。に。御。館  
 を。修。補。な。し。と。多。れ。君。女。い。久。も。お。べ。し。供。奉。の。面。に。花。を。飾。り。夜  
 日。に。継。ぎ。大。嶋。へ。至。り。し。田。村。磨。屋。御。悦。斜。ま。は。昔。に。替。れ。旅。の  
 山。立。其。と。は。美。く。及。嚴。重。に。御。般。の。あ。は。し。い。久。く。み。風。ふ。籠。り。て。帰。り  
 来。よ。し。て。招。く。也。や。彼。の。鼓。と。樂。を。奏。し。既。小。大。嶋。が。立。出。し。て。あ。ふ  
 漢。父。亦。と。海。岸。に。お。し。伏。す。別。次。惜。ま。な。れ。み。此。歳。月。親。く。懇。ろ。う  
 事。の。悦。し。と。多。く。金。銀。と。漢。父。亦。給。り。生。の。既。十。分。お。け。て



跡あふ浪と糸出のあまの雲はななく都の館ふ着る人む此日種継御  
 父子次第始め親戚皆會合すりて喜びの眉は用かきし  
 月雪姫の嫁りのうれし涙の先づら今更何よりか言ひ  
 多んと御さるの葉さるるしも思ひ中もあつたりなり田村磨も  
 御悦法くは往來嶋ふりりあひてよりのつ白鷹の便又白雪  
 か水も溺れしりどもかか民部が告めく始て敵に三つ知多し  
 事ども細中り語合飲ひあふ事限りなし其村種継郷直く今宵  
 八旗の疲と休め明るが奈内ありて君恩に謝せられよ將此度妹  
 鬼退治の勅命輕きにあらば能く治と盡し大功をたられん  
 從貴家の繁榮限りのめじとふくの御物語も冬この日れいと短

く暮れれば間毎に燈火多く建連ひく。夜半の酒宴は振く鼓聲  
 籠み満く。皆千秋万歳と祝し。酔をばして退せり。斯く明も  
 田村磨の才は清め服を改めと内ありたり。天皇御膝近らり。淺  
 うね勅命ありて朕不明はして嚮ふ。汝が家と亡せし。返り悔も  
 及びて依り此度召は坂上家繁榮あるをいし。且鈴鹿の妖怪  
 ホ次守も増長して略天下の憂はなると。近頃弓削大進も  
 を差向し却て妖怪ホが為し辱られ多く官軍に傷ひぬ。これ  
 汝速にお向つて魔軍を平け。萬民の憂を拂ひ。傾ふ大功を立て  
 家も耀とせし。いともかこれ勅命。田村磨も感涙を止り。種  
 謹んで命を領し。御前退れし。是公卿も對面なり。勅命の  
 重れを厚く謝し。なされぬ。是公卿も後々これ面會おは



悦よろこひ斜あやうららび急いそげととく馳かけ向むかつつ切きをまられよ待まち我われ仄ひかずく  
 弓ゆみ木き照あ門かど大おほ伴とも貞まこと純まこと大おほ伴とも高たか貫つら等らりの程ほどあり鈴すず鹿か山やま道みちをひ隠かくれ  
 彼あ山やまの強つよ盜とう亦またと志こころ次つぎ一ひとよよはは魁くわい首うぶ章あきら駄だ天てん刑けい部ぶふふ才さいととせせそそ共ともお  
 悪あく業ごうととははししぬぬととここそそせせぬぬ將まさ足あしをを平ひらぐぐんんぬぬ官くわん軍ぐん幾いくりり具ぐしたしたままりりや  
 其その望のぞまま任まかささべべととありありたたれれババ田の村むら磨ら謝しゃして宣のたまひひ某その自みづか誇かととややは  
 ありありたたれれもも唯ただ百ひゃく余あまり騎きとと授まかささりりハハ某その猶なほ世よ臣おん因よ心こころ顧かへりのの者ものもも又  
 引ひ具きして誓ちか言ごて妖まじ鬼まじとと許ゆるささししとと宣のたまひひ是こゝ公こう卿けいとと示しめしし合あははれれ退ひき朝あさあり  
 て速すみ小こ軍ぐんとと整ととのへへ十二じふに月げつ十じふ日にち小こ平へい安あ京きやうとと打うち出だすすののふふ都みやこはは跡あと人ひとととも  
 門かど出だとと祝いわして袂たもととと別わかれれぬぬ

田村物語 卷之五 上卷 畢



